

ドライアイの画像診断とガイドライン Update

有田玲子（伊藤医院）

近年の眼科領域の画像診断の進歩はめざましい。ドライアイ領域においても、透明である角膜を覆っている透明な涙液を可視化する画像診断が臨床応用されてきた。涙液油層を分泌するマイボーム腺を可視化するマイボグラフィ、涙液油層干渉縞を可視化するインターフェロメトリー、涙液メニスカスを可視化する前眼部 OCT、波面収差を可視化するトポグラフィなど、多くの画像診断技術が実際の臨床の場で活躍している。さらに、従来から臨床応用されている検査法による結果を現在の知識や概念をもとに解釈することで、涙液のどの層に異常をきたしているのかの情報をくみとるのがフルオレセイン染色パターン分類である。ドライアイの定義、診断基準が 2016 年に改訂され、今年にはガイドラインが新たに発表され、今後ますますエビデンスに基づいた治療がなされるようになる。本講演では、日進月歩で進んでいくドライアイ研究に基づく情報のなかで、なるべくシンプルにドライアイを診断し、病態を理解しながら治療していく筋道をお示しできればと思っている。